



平成 29 年度 小樽商科大学学術研究奨励事業
第 12 回 「学生論文賞」

国立大学法人小樽商科大学

グローバル戦略推進センター教育支援部門

目次

総評.....	1
審査結果一覧.....	2
ヘルメス賞及び優秀賞講評.....	3
審査員一覧.....	6

総 評

学生論文賞実施委員会

委員長 上山 晋平

今年度は、学部生部門に38編の応募がありました。所属学科の内訳は、商学科が18編と最多で、続いて社会情報学科から15編、経済学科から4編、企業法学科から1編の応募となりました。大学院生部門には、応募はありませんでした。

審査については、2段階審査で行いました。第1次審査は、37編について、多分野の研究に携わる33名の教員が、学術横断的な視点からプレゼンテーションの審査を行いました。第2次審査は、第1次審査を通過した20編について、論文内容に関連した研究に携わる27名の教員が論文の審査を行いました。

厳正なる2段階審査の結果、大賞となるヘルメス賞1編、優秀賞6編、奨励賞7編、第1次審査のプレゼンテーションで最上位の得点を得た論文に授与されるプレゼン賞1編、発想・構成・技術等、際立って卓越したものがあ論文に対して授与される特別賞1編となりました。

ヘルメス賞や優秀賞といった上位入賞者の論文は、特に第2次審査において審査員から高い評価を得ています。「研究の目的・テーマ設定」、「研究の手法・分析方法」、「研究の内容・論理性」、「研究の独創性・斬奇性」の点で、奨励賞受賞論文やその他の論文に比べて全体として高い評価となっています。奨励賞受賞論文やその他の論文は、上記4つの観点でいくつか低い評価がなされています。特に、先行研究のレビューや考察が不十分であることが評価を下げる要因となりました。全体的には、誤字脱字や参考文献の書き方に問題があるなど形式要件が整っていない論文もあり、改善の余地があると考えております。一方で、テーマ設定が独創的である、論文構成が自然で読みやすい、高度な分析を行っていることなどが評価されている論文も多くありました。

本論文賞では、2段階審査のいずれにおいても、応募者への評価のフィードバックが行われています。これは論文執筆のノウハウや研究能力のレベルの向上につながるものですので、ぜひ今後に役立てていただきたいと思います。

今年度もご多用の中、審査にご協力いただいた教員の皆様には、厚く御礼を申し上げますと共に、来年度も是非ご協力賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、本論文賞の実施に当たりまして、株式会社北洋銀行様より例年と変わらぬ多大なご支援を頂戴いたしました。記して感謝の意を表します。

審査結果一覧

ヘルメス賞

「コミットメントを考慮した真のロイヤルティ形成プロセスに関する考察
—航空旅客輸送サービス利用者へのライフストーリー・インタビューを通じて—」
三浦 晴華

優秀賞

「Instagram の利用動機と購買行動についての考察」
安彦 絵美子

「体育会学生における社会人基礎力に関する分析
～小樽商科大学の大学生を対象とした体育会とサークルの比較分析～」
田中 慶一

「反復局所探索法に基づいたスケルトンパズルの生成アルゴリズム」
西島 善治

「日本の会計における内部統制の研究の変遷についての一考察」
阿達 あゆみ

「ファミリービジネスにおける戦略転換メカニズムの解明
—コンフィギュレーション・アプローチによるトヨタ自動車の事例分析—」
神谷 滯奈

「国土の規模を考慮したフードマイレージの試算」
佐藤 誠弥

奨励賞

「多角化戦略における関連多角化の新たな視点
—九州旅客鉄道におけるドメイン関連多角化の事例分析—」
新居 七夏

「SNS における旅行情報収集に関する考察
—RAM と ROM の比較を通じて—」
三浦 圭織

「イラストロジック問題の自動生成アプリの開発」
小木田 方人

「スポーツ・ツーリズムに関する市民マラソン大会参加者の
セグメンテーションと再参加意図との関係についての分析」
濱田 勇利

「チャンネル・パワー論におけるクラウドファンディングの考察」
江野 秀一

「飲食小売業の業態革新に関する考察-札幌シメパフェの事例分析を通じて-」
仲保 圭子

「How to Raise Funds with Country-Of-Origin Effect」
安田 百花

特別賞

「反復局所探索法に基づいたスケルトンパズルの生成アルゴリズム」
西島 善治

ベスト・プレゼンテーション賞

「How to Raise Funds with Country-Of-Origin Effect」
安田 百花

ヘルメス賞及び優秀賞論文講評

ヘルメス賞

「コミットメントを考慮した真のロイヤルティ形成プロセスに関する考察

—航空旅客輸送サービス利用者へのライフストーリー・インタビューを通じて—

三浦 晴華

ポイント・プログラムのようなフリークエンシー・プログラムは顧客関係マネジメントの手法として浸透している。しかし行動ベースのプログラムが中心であり、製品やサービスに愛着を持ち他人への推奨意向や価格プレミアムを受容する真のロイヤルカスタマーではない顧客が多く含まれることになる。また顧客の維持に関心が偏り、顧客の開拓獲得には配慮がされていない。このため企業にとってリスクと発展可能性の阻害となっている。

本論文はこのギャップを、ロイヤルティとともにコミットメントを重要次元として導入して克服しようとした意欲的な研究である。ロイヤルティとコミットメントの関係モデルを軸として、定性的調査によりロイヤルティのダイナミックな生成・変容を描き出している点は高く評価できる。

問題の定式化、先行研究の理解、リサーチ・クエスションの導出など議論が一貫して展開されており、また、ページ数の制約がある中でライフストーリーの調査分析内容を的確にまとめている点も評価できる。以上のとおり学術的に高い価値を有する知見を提示している。

優秀賞

「Instagram の利用動機と購買行動についての考察」

安彦 絵美子

本論文は、近年話題となっている SNS サービスの Instagram におけるユーザー利用動機、及びそれと購買行動との関連性に着目した仮説検証型研究である。本テーマに関する国内外の既存研究をレビューした後、既存研究の課題を指摘し、仮説を立てている。また、海外における先行研究に基づいた尺度を用いている点、および調査データを適切な統計手法を用いて分析している点が評価できる。調査データを韓国における先行研究の成果と比較することで日本人固有の利用動機があることを明らかにしていることに加え、Instagram の利用動機と購買行動との関連性についても明らかにしていることは本論文の独創的な点である。惜しまれるのは、本論文が日韓の間接的比較にとどまっており、日本のみならず韓国においても一次データを自ら収集していれば両国のデータの直接比較が可能になり、よりすぐれた研究になっていた点である。総じて、本論文は理論と実務の双方への貢献を目指し、研究の設計から実施まで極めて意欲的に取り組んでおり、学部学生の論文として優秀なレベルにあり、高く評価できるものとなっている。

「体育会学生における社会人基礎力に関する分析

～小樽商科大学の大学生を対象とした体育会とサークルの比較分析～ 田中 慶一

本論文の主題は社会人基礎力という概念を用い、大学教育の中で特に課外活動の意義を解明した論文である。着想の起点は体育会出身学生が就職活動にて評価される点に着目し、体育会系学生と文科系サークル所属の学内学生に対してアンケート調査を実施し、社会人基礎力という尺度と課外活動との関係性について要因抽出型研究を実施し集団活動の態度に関する諸側面について4クラスターを抽出した。さらに、これら4要因について形成される成長項目（社会人基礎力）を取り上げ、文科系サークル学生と体育会部学生との2グループでの比較分析を分散分析により仮説検証型研究において分析した。

まず、関連する既存研究をもとに本課題である社会人基礎力と大学教育（正課教育と課外活動）のとの関係性について着目し、既存研究では空白域となっている課外授業と社会人基礎力獲得との関係を研究課題とし、アンケート調査を実施し、多岐にわたる定量的分析を展開した。課外活動の社会人基礎力の育成について分析した結果、文科系サークル部員のプレゼンテーション力や説得力の分野での成長、体育会部員における実行力、規律性での成長をその特徴として抽出し、一般的な理解と合致する結果を導出した。

分析結果は至極当然の結果ではあるが結論を引き出すまでの既存研究の積み上げによる課題の発見、構成概念の論理的構築、論証に至る仮説検証のスキーム、検証の際の統計手法の活用等、高く評価でき、学部学生の論文とし高い水準にあると評価する。

「反復局所探索法に基づいたスケルトンパズルの生成アルゴリズム」

西島 善治

本論文は、スケルトンパズルの自動作成問題を制約付き最適化問題として定式化し、反復局所探索法により近似解を求めている。その結果、提案法では従来法の厳密解を求めるアルゴリズムに比べ、計算量の削減が可能であることを実験的に示した。具体的には、従来のスケルトンパズルの生成規模が3600秒で9x9であったのに対し、提案法では120秒で30x30という規模にまで改善したことは、特筆に値する。ただ、本論文の120秒という時間の設定には、さらなる検討の余地があるように思われる。

全体としては、問題の数理モデル化と改善のアプローチがきちんとしている点が素晴らしい。この利点は、モバイル端末向けのアプリとして実装した際にも大いに生かされているように思われる。また、スケルトンパズルにおける単語に、小樽に関連する語を採用し、地域のイベントで活用した点も興味深い。

「日本の会計における内部統制の研究の変遷についての一考察」

阿達 あゆみ

本論文において、筆者は、内部統制への関心を高める出来事（法律の公布等）を基準にして、1950年代および2000年代を抽出した上で、それぞれの年代において内部統制がどのように論述されているのかを考察している。

本論文に関して、方法論として、わが国主要会計雑誌に掲載された「内部統制」に関する多くの論文を対象として、1950年代および2000年代それぞれの内部統制に関する論点を、理論と実務との融合がどのように図られているのかを意識しつつ、独自の着眼点のもとでまとめあげた点を評価できる。加えて、結論として、企業を取り巻く環境の変化に応じて、内部統制のあり方も変化すると同時に、経営者の意識によって内部統制の機能も変化することを明らかにした点も高く評価できる。

方法論や論理的な展開に一工夫を加える余地を残すとはいえ、本論文は、学部学生の論文として高い水準にあるといえる。

「ファミリービジネスにおける戦略転換メカニズムの解明

—コンフィギュレーション・アプローチによるトヨタ自動車の事例分析— 神谷 滯奈

本論文は、日本大企業の代表格であるトヨタ自動車をファミリービジネスとして捉え、コンフィギュレーション・アプローチによる当社の戦略転換メカニズムを明らかにしようと試みたものである。ファミリービジネスとしてトヨタ自動車を捉える視点が非常にユニークであり、また、コンフィギュレーションを構成する要素として、ドメイン、ガバナンス、財務戦略とそれぞれの関係性に注目して分析を展開している点も独創的だと評価できよう。三つの構成する要素分析のなかで、とりわけ財務戦略の分析は1次資料に基づき独自の方法で詳細に展開されており、分析の結果も納得的である。他方、具体性から言えば、ドメインとガバナンスの分析に課題を残しているが、総じて、学部学生の論文としては高いレベルにあると評価できる。

「国土の規模を考慮したフードマイレージの試算」

佐藤 誠弥

世界人口の爆発的な増加に伴い、食糧増産は、避けて通れない地球規模の課題となっている。本論文では、食料供給の良し悪しを表す指標として、これまで採られてきた二つの食料自給率の問題点を指摘し、国の人口と面積、それに国内での輸送距離を考慮した指標フードマイレージを提案している。アメリカやEUは、国内（域内）輸送距離が大きくなるために、日本よりもフードマイレージが大きくなること、国民一人あたりで見ると、従来の食料自給率で示されるのと同様、日本のフードマイレージは高いが、アメリカやEUもフードマイレージが大きくなることを指摘している。食糧増産を考える上で本来考慮すべき要因が他にもあるかどうか、など、もう少し深い考察があるとより説得的になると思われるが、独自の視点があり、学部学生の論文としては高い水準にある。

審査員一覧

第1次審査員一覧 (50音順)

穴沢 眞	池田 真介	井上 典子	猪口 純路
内田 純一	大津 晶	小倉 一志	小山田 健
上山 晋平	後藤 英之	小林 友彦	サーマン・ジョン
佐々木 香織	佐山 公一	白田 康洋	瀬戸 篤
高野 宏康	多木 誠一郎	玉井 健一	中津川 雅宣
西永 亮	西村 友幸	花輪 啓一	羽村 貴史
林 松国	坂東 雄介	副島 美由紀	船津 秀樹
プラート・カロラス	松本 朋哉	三谷 和史	李 賢峻
和田 良介			

(以上33名)

第2次審査員一覧 (50音順)

穴沢 眞	阿部 孝太郎	伊藤 一	猪口 純路
乙政 佐吉	加賀田 和弘	北川 泰治郎	小泉 大城
近藤 公彦	齋藤 一朗	堺 昌彦	佐藤 剛
佐山 公一	柴山 千里	鈴木 和宏	高田 聡
高宮城 朝則	中浜 隆	西村 友幸	沼澤 政信
林 松国	原口 和也	深田 秀実	船津 秀樹
プラート・カロラス	行方 常幸	李 濟民	

(以上27名)